思春期における「心の拠り所」となる学校生活に関する研究[注1)]

—「学校生活で打ち込めるもの」,「学級・友人への意識」を通して—

内田利広・川戸智司行
（京都教育大学）　（網野町立網野中学校）

A study on school as 'a support network' in adolescence

— focusing on "student's enthusiaum" and "consciousness of homeroom and friends"—

Toshihiro Uchida • Toshiyuki Kawato

2002年11月30日受理

抄録：本論は，思春期における「心の拠り所」について，最近の不登校児童・生徒の増加という視点から検討し，さらに実際の中学生が，学校生活の中でどのような意識を持ち，どのようなところに心の拠り所を求めているのかを，質問紙調査によって明らかにしたものである。

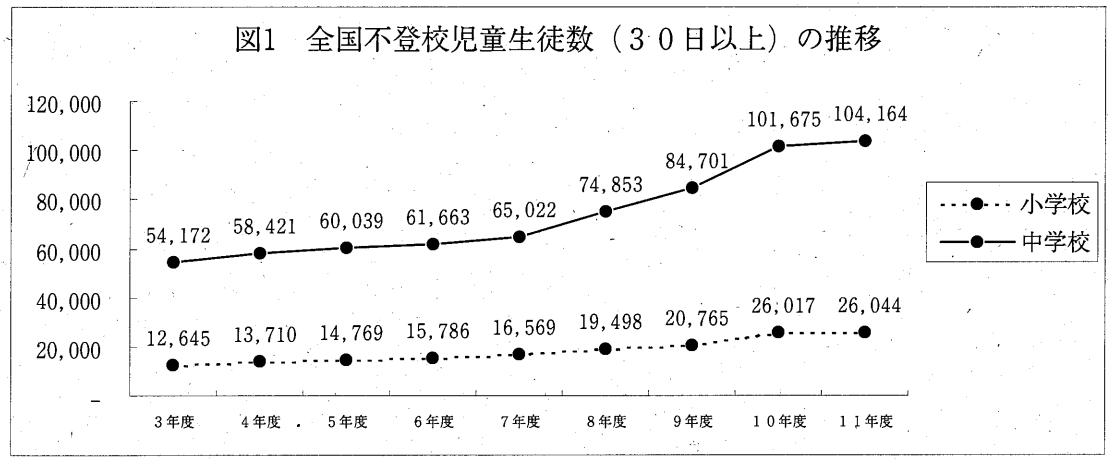
その結果，打ち込める取り組みとして，男女ともに「クラブ活動」と「友達との会話」を重視しており，さらに友達関係がうまくいっているか否かが，学校生活における自分の存在を確認する重要な要因であり，自分の悪いところを注意してくれるような本当の友人の存在が，「心の拠り所」となっていることが考察された。

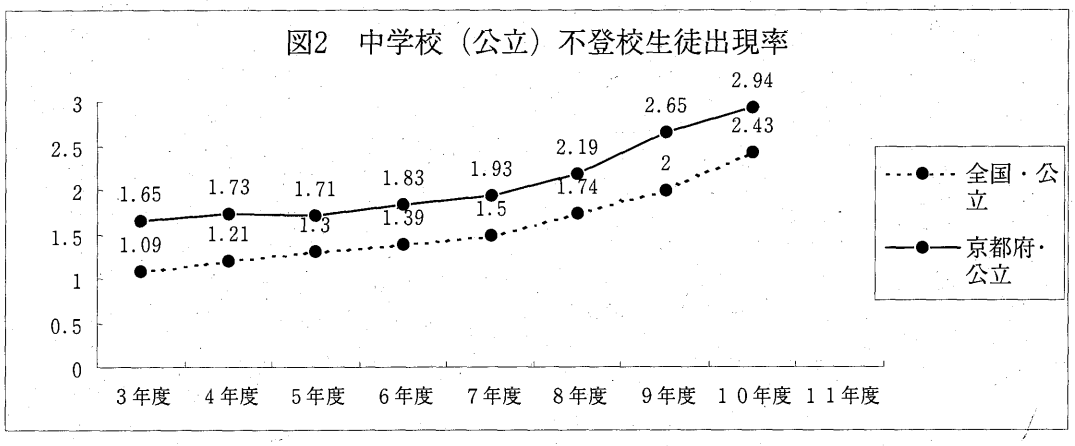
キーワード：思春期，心の拠り所，打ち込めるもの，友人関係

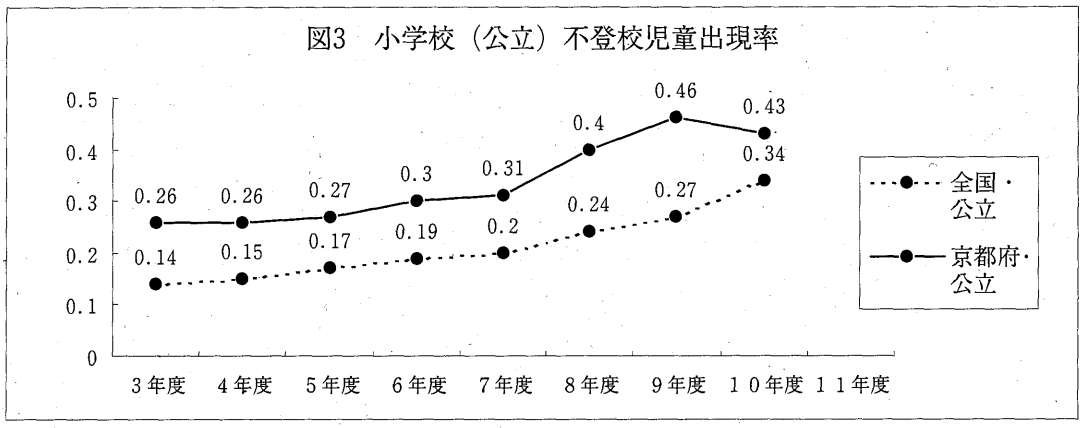
Ⅰ　問題と目的

文部省[注2)]が平成元年7月に設置した「学校不適応対策調査研究協力者会議」では，「登校拒否とは，何らかの心理的，情緒的，身体的，あるいは社会的要因・背景により児童生徒が登校しないあるいはしたくてもできない状況にあること（ただし，病気や経済的な理由によるものを除く）という。」と定義している。実際，「登校拒否」という言葉は学校に行きたくてもいけない心理的葛藤があるのにそれを適切に表現しておらず誤解を招く場合があるということから，「不登校」という学校に登校していない現象をあらわす言葉が用いられている。

不登校児童生徒の状況は，文部省学校基本調査によると，国・公・私立の小・中学校で，平成11年度に「不登校」を理由として30日以上欠席した不登校児童生徒は，小学生26,044人（前年度比27人増），中学生104,164人（前年度比2489人増）の合計130,208人であり，調査開始以来最多となっている（図1）。







公立小・中学校の不登校児童生徒の出現率（全国公立と京都府公立比較）を見てみると，京都府公立小学校では平成10年度には減少傾向に転じているが，全国公立小学校・全国／京都府公立中学校では増加傾向で推移していることが伺える（図2，3）。

全国の公立小・中学校において平成10年度に30日以上欠席した不登校児童生徒数は，小学生25,910人（前年度比5,209人増），中学生100,112人（前年度比16,086人増）となっている。学年別に見ると，小・中学生ともに学年が進むにつれて多くなっており，特に，小学校6年から中学校1年，中学校1年から2年になると大きく増加している（図4）。

また，平成10年度文部省学校基本調査によると，公立中学校における不登校状態となった直接のきっかけは，学校生活に起因するものとして「友達関係をめぐる問題（いじめ，けんか等）」19.7%，「学業の不振（成績の不振，授業がわからない，試験が嫌い等）」9.9%，「入学・転偏入学・進級時の不適応」3.0%が上位を占め，家庭生活に起因するものとして「親子関係をめぐる問題（親の叱責，親の言葉・態度への反発等）」8.3%，「家庭の生活環境の急激な変化（親の単身赴任等）」5.0%，「家庭内の不和（両親の不和，祖父母と両親の不和等本人に直接かかわらないこと）」4.1%，本人の問題に起因するものとして［病気による欠席］6.8%，「その他本人に関わる問題（極度の不安や緊張，無気力等で他に特にきっかけとなるような事柄がみあたらないもの）」28.7%などをあげている。そして，公立中学校における不登校状態が継続している理由として，「不安など情緒的混乱」24.8%，「無気力」21.9%，「複合」21.7%，「あそび・非行」13.4%，「学校生活上の影響」8.2%などをあげている。

不登校の増加，出現率の上昇，不登校状態に陥った直接的なきっかけや継続している要因などについて，杉山ら（1988）は学年があがるにつれて不登校児童生徒の出現率が上がっていく傾向を「右上がり型」と名づけ，登

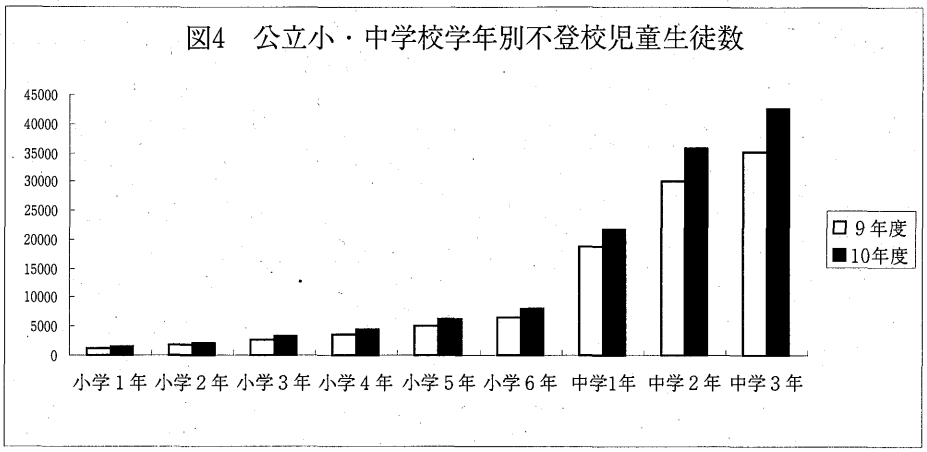


図 4　公立小・中学校学年別不登校児童生徒数

校拒否，怠学に加え，内気・小心，非行化傾向，触法行為がこの型に含まれ，「これらは思春期の進行において，急増するものであり，いずれも受験期にピークとなり，教育の過熱ないし教育からの疎外との関係を窺うこともできる」と述べている。保坂（1995）は，「不登校はその出現傾向からいっても個人の問題というよりも学校教育の問題として捉えるべきことが指摘できる」としている。すなわち，不登校状況は児童・生徒が現在の学校教育から疎外されているのではないか，現在の学校教育が作り出しているのではないかという学校教育に対する問題提起である。

平成４年に「学校不適応対策調査研究協力者会議」の報告をもとに文部省は，不登校は「どの児童生徒にもおこりうるものである」と視点を変えた。このことは，不登校を引き起こす要因が複雑化・多様化しており，一元的に捉えることができないことの現れであると思われるが，では，なぜ約 97％の生徒が不登校にならないのであろうかという疑問が浮かび上がってくる。この中には不登校の潜在群が含まれているにもかかわらず不登校にならないという事実は，学校教育のあり方によってはかなりの部分不登校の予防や再登校がなし得るのではないかという学校として取り組むべき方向を示唆していると考えられる。学校が課題を抱える生徒をはじめ，全ての生徒にとって登校するに値する「学校」であるか，学校に魅力があるかという学校の在り方が問われているということであろう。つまり，極論するなら，学校に登校しようとする生徒に主体形成の課題があっても学校に生徒をひきつける力があれば不登校に陥らなくてもいいということになる。

先にも述べたが，公立中学校において不登校状態となった直接のきっかけが「本人に関わる問題（極度の不安や緊張，無気力等）」「友達関係をめぐる問題（いじめ，けんか等）」が上位を占め，不登校状態が継続している理由として「不安など情緒的混乱」「無気力」が上位を占めていることから，学級集団における対人関係の在り方が不登校状態と大きくかかわっていると思われる。事実，学校現場では仲間が自分の気持ちを受け入れてくれるか不安で自分の気持ちを素直に表現できない，いつも自分がどのように思われているか気になり学級の中で過度に緊張する，過度に仲間の評価を気にするなど生徒同士の人間関係に心くだくなど，中学生は心理的に不安定な状態になっていることを実感することが多い。筆者（1999）は思春期の心理について，思春期は自分の存在感が希薄になる時期ではないかと考え，つまり，「自分」というものが非常につかみにくく，まわりの関係や状況に対して感受性が非常に高まり，まわりの影響をうけやすく，心のバランスを崩しささいなことに傷つき自分の存在感に自信が持てなくなる時期なのではと述べた。この不安定さが人間関係を結ぶ上でさまざまなつまずきを生じさせる，また，人間関係上のつまずきがより不安傾向を助長させるという悪循環の中で，家庭環境や学業不振，学校で学ぶ意義を見出せない，非行などのさまざまな要因が絡み合い，不登校の問題を複雑化させているのではないかと思われる。

本研究では，不登校を考える上で学校の生徒を引きつける力と学級集団における対人関係の在り方を視野に入れ，中学生が学校生活において，学業や部活動，担任の先生や友達をどのように認知しているのか，学級集団の中で感じている対人不安をどのように認知しているのかということを学校に登校している生徒を対象に質問紙によって調査し，学校生活が楽しいという学校に対する肯定感情と学校へ行きたくないという学校に対する否定感

情がどのような側面と関係が深いかということについて検討することを本論の目的とする。

II　方法

1．調査対象

京都府内の複数の公立中学校1～3年生で，1年生87名，2年生79名，3年生96名，計262名。

2．調査内容（質問紙構成）

(1) 学業や部活動，担任の先生や友達，学級をどのように認知しているのかを探るため，一谷・相田・水谷（1990a）の「学校生活についての調査」を参考に「学校生活に対する充実感」の項目を8項目作成した。

(2) 友達関係をどのように認知しているのかを探るため，一谷・相田・水谷（1990a）の「学校生活についての調査」と京都府総合教育センターの「生徒の人間関係の結び方に関する研究」の調査を参考に「学校生活における友達意識」に関する項目を7項目作成した。

(3) 学級集団の中で感じている対人不安をどのように認知しているのかを探るため京都府総合教育センターの「生徒の人間関係の結び方に関する研究」の調査を参考に，「学校生活における対人不安感」に関する項目を8項目作成した。

このように質問紙は23項目の構成としたが，1項目は複数回答可の選択方法とし，他22項目については4件法とした。

3．調査手続き

平成12年7月，無記名の質問紙法による学級単位ごとに一斉に，学級会活動の時間に約15分を費やして学級担任が実施した。

III　結果と小括―学校生活に関する意識実態

質問紙に対する1年生87名，2年生79名，3年生96名，計262名の回答を設問ごとに集計し，全体，学年別，男女別で回答をパーセンテージで示した。

この意識調査結果に基づき，中学生の学校生活に対する意識の傾向を把握すると共に，課題について考えてみたい。

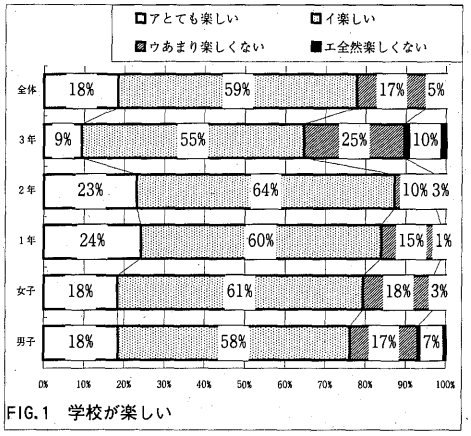


FIG.1　学校が楽しい

問1　あなたは，今，学校が楽しいですか。(Fig.1)

全体では，77%の生徒が「とても楽しい」「楽しい」と回答している。学校が楽しいという傾向は男子76%，女子79%と，やや女子が高いものの，学年別で見ると，3年生が64%と最も低いことが伺える。

しかし，学校が楽しい傾向と学校が楽しくないとする傾向では，他の設問に対する回答にどのような違いが出ているのであろうかという疑問が浮かび上がってくる。

この違いを検討することによって，学校が楽しい傾向を促進している要因をある程度推測することができると思われる。

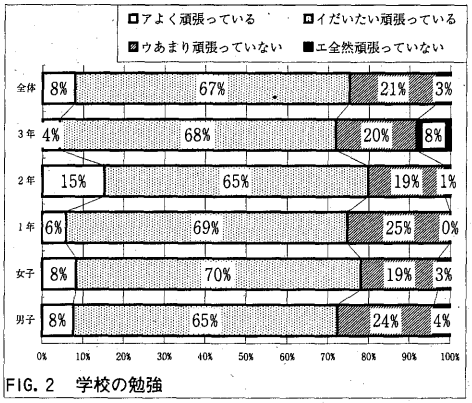


FIG. 2　学校の勉強

問2　あなたは，今，学校の勉強についてどう思っていますか。(Fig.2)

全体では，75%の生徒が「よく頑張っている」「だいたい頑張っている」と回答している。学級・学年・全校において「努力を大切にする」という雰囲気が感じられる。

しかし，「あまり頑張っていない」「全然頑張っていない」と回答した生徒は，男子が28%，女子が22%と男子が少し多い傾向を示している。学年においては「全然頑張っていない」という生徒の割合が1年0%，2年1%，3年8%と高くなっている。

問3　あなたは，今，友達との関係はどのようになっていますか。(Fig.3)

全体では，92%の生徒が「うまくいっている」「だいたいうまくいっている」と回答している。学年別に見ても，1年96%，2年88%，3年92%と全体の傾向と同様の傾向を示している。全体としては，現在の友達関係の在り方におおむね満足していることが伺える。

しかし，男女別に見ると，「あまりうまくいっていない」「全然うまくいっていない」と回答した生徒は，男子が4%女子が13%と，女子が多少多くなっており，女子は現在の友達関係に何らかの悩みや問題点を抱えやすいのではないかと推測される。

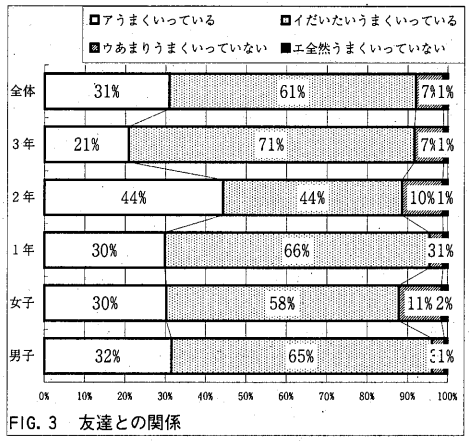


FIG. 3　友達との関係

問4　あなたは，今，担任の先生との関係はどのようになっていますか。(Fig.4)

全体では，88%の生徒が「うまくいっている」「だいたいうまくいっている」と回答していることから，担任と生徒の人間関係はおおむね良好であることが伺える。

学年別に見ると，「うまくいっている」「だいたいうまくいっている」と回答した生徒が1年93%，2年91%，3年82%と，学年を追うごとに少しずつ減少していく傾向を示している。このことから，担任との間に擦違い感を抱いている生徒が増加していくことが推測される。

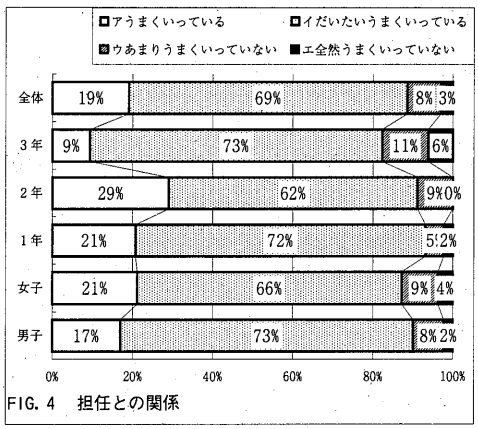


FIG. 4　担任との関係

問5　あなたは，自分の学級についてどう思いますか。(Fig.5)

全体では，71%の生徒が「大変よい学級である」「よい学級である」と回答し，学年別にみても同様である。このことは，自らが所属する学級集団に対する評価が概ね高いことを示していると思われる。

しかし，30%前後の生徒が「あまりよくない学級である」「全然よくない学級である」と回答していることについて，その要因を分析する必要があると思われる。

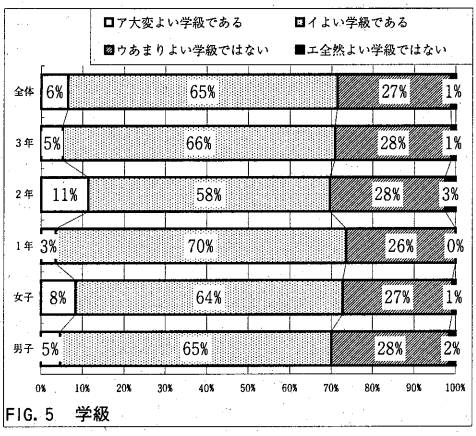


FIG. 5　学級

問6　あなたは入部している部活動についてどう思いますか。(Fig.6)

全体では，90%の生徒が「よく頑張っている」「だいたい頑張っている」と回答している。また，男女別に見ても，ほとんど差は見られない。部活動に対する意欲が高いことが伺える。

しかし，学年で見てみると学年が進むにつれて「よく頑張っている」「だいたい頑張っている」と回答している生徒が1年95%，2年91%，3年85%と減少している。

部活動が同じ目的を持つ生徒によって形成されている異年齢集団の活動であるにもかかわらず，このような差異が生じてくる背景として，個々の生徒に競技などの技術習得に差が生じ，更にそのことが部集団への所属感に差を生じさせることなど，様々がことが考えられる。

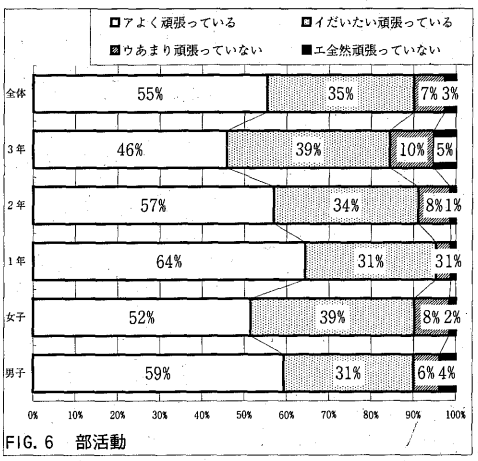


FIG. 6　部活動

問7　あなたは，学校生活の中で，打ち込んで取り組むこと（勉強，クラブ活動，生徒会・学級の仕事，生徒会及び学校行事　など）がありますか。(Fig.7)

全体では，80%の生徒が「いつもある」「ときどきある」と回答している。この傾向は，各学年においても同様である。

しかし，20%の生徒が「あまりない」「全然ない」と回答しており，学校の教育活動の中でいかに全員に教育内容に興味・関心を持たせ，学ぶ意義や目的意識を持たせて活動に引き込み達成感や充実感を味わわせることの難しさを示唆していると思われる。

そして，3年生において7%の生徒が「全然ない」と回答しており，他学年と比べ最も多い。このことは，最終学年であるこの時期に，「打ち込むこと」が見出せないという状況は深刻である。

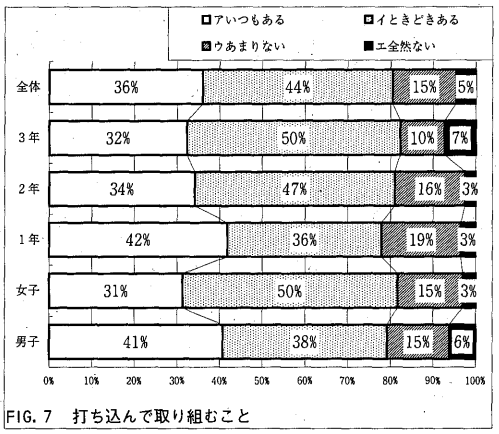
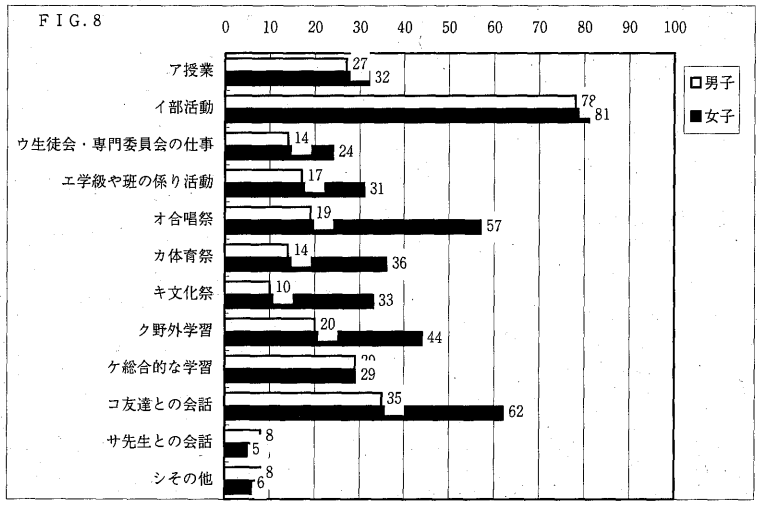


FIG. 7　打ち込んで取り組むこと

問8　問7で「ア　いつもある」「イ　ときどきある」と答えた人は，どんなことに打ち込んだりしているのですか。次の中から選んでください。（複数回答可）(Fig.8)

男子に比べ女子は数多くの教育活動に「打ち込むこと」を見出し，積極的に取り組み，充実感を味わっていることが伺える。また，男子において第1位が「部活動」，第2位が「友達との会話」，第3位が「総合的な学習」，第4位が「授業」であり，女子においては第1位が「部活動」，第2位が「友達との会話」，第3位が「合唱祭」，第4位が「野外学習」となっている。

男女に共通していえるのは，「部活動」や「友達との会話」が学校生活の中で重要な位置を占めていることである。このことは学校という集団の中に自らを位置付けるために大変重要な意味を持っているのではないかと推測される。



問9　あなたは，学級の中に，気楽に話しかけてくれる友達がいますか。(Fig.9)

全体では，99%の生徒が「6～10人」「2～5人」「1人」と回答している。

気軽に話し掛けられる，声をかけられることで，人はそこに自分という存在を実感できるのではないか。しかし，全く声もかからず，忘れ去られた存在として学校生活を送らなければならないのであれば，どのような思いにかられるのであろうか。

1%の「全くいない」という生徒の存在を私たちも見落としてはならないのである。生徒を支援する上で，「声がかかる存在」として集団の中に映し出していくことが一つの指標であるように思われる。

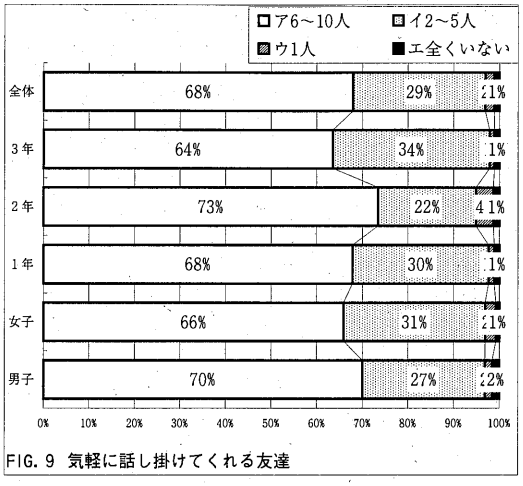


FIG. 9　気軽に話し掛けてくれる友達

問10　あなたは，悩みを打ち明けたり，相談したりする友達はいますか。(Fig.10)

全体では，84%の生徒が「多くいる」「少ないがいる」「一人だけいる」と回答している。また，学年が進むにつれて少しずつ高くなる傾向を示している。逆に，「全くいない」と回答した生徒は1年20%，2年15%，3年13%と学年が進むにつれて減少する傾向を示している。

男女別で見ると，女子が8%であるのに24%もの男子が「全くいない」と回答していることが気になる。

問9で99%の生徒が「気軽に話し掛けてくれる」と回答しているにもかかわらず，16%もの生徒が「悩みを打ち明けたり，相談したりする」友達がいないということをどう考えればいいのだろうか。

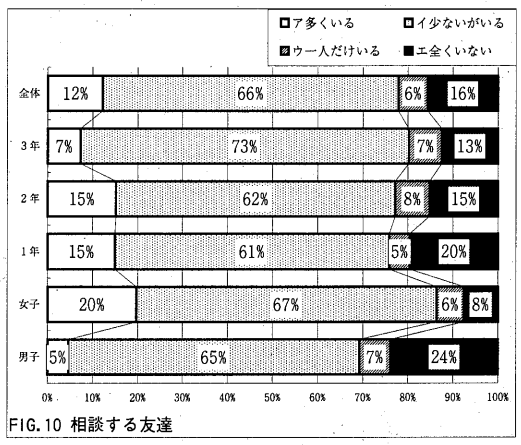


FIG. 10　相談する友達

問11　あなたは，自分の班や学級の仲間がどんなことを考えているか知りたいと思いますか。(Fig.11)

全体では，51%の生徒が「よく思う」「思う」と回答している。

また，学年では，1年43%，2年51%，3年59%と「よく思う」「思う」という生徒が増加している。

男女別では，男子41%，女子62%と「よく思う」「思う」という生徒が女子に極めて多い。

このことは，他の生徒との関係性の中で自分の居場所を決めている，他の生徒の興味・関心や志向などを知って自分を他の生徒に合わせていく，自分の考えと他の生徒の考えを照らし合わせ他の生徒を通して自分の考えの是非を判断していこうとするなどの生徒の心の動きが学年進行とともに強くなるのではないか。そして，女子に顕著にその傾向が見られるのではないか。

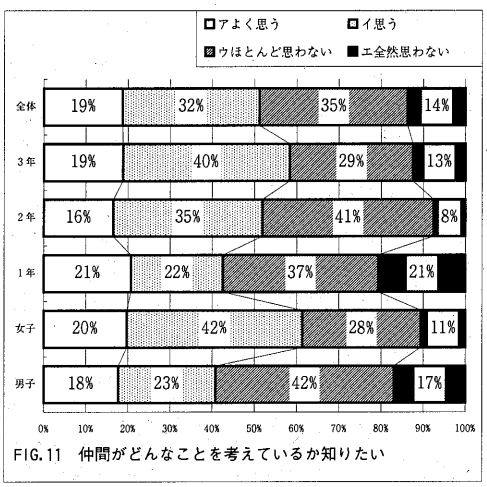


FIG. 11　仲間がどんなことを考えているか知りたい

問 12　あなたは，自分の班や学級の仲間が間違ったことや悪いことをしていたら注意したいと思いますか。(Fig. 12)

全体では，62％の生徒が「よく思う」「思う」と回答している。学年別に見ても同様の傾向である。また，男女別では，「よく思う」「思う」と回答した生徒は男子57％，女子68％と女子に多い。）しかし，「全然思わない」と回答している生徒が学年を追うごとに増加し，女子よりも男子に多い。

班や学級で集団生活を送っているにもかかわらず，間違ったことや悪い行為に対して注意することに躊躇したり無関心であるという心理はどのようなものであろうか。この問と同様の傾向を示していると思われるのは問5「自分の学級についてどう思いますか」である。このことは注目すべき点である。

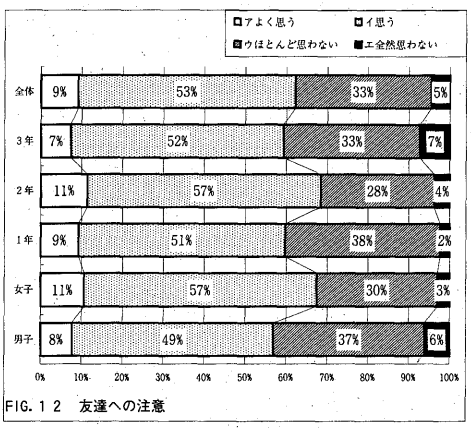


FIG. 1 2　友達への注意

問 13　あなたは，自分が間違ったことや悪いことをしていたら注意してくれる友達がいますか。(Fig. 13)

全体では，89％の生徒が「多くいる」「少ないがいる」と回答している。学年別では，1年では 93％，2年では 89％，3年では 83％と「多くいる」「少ないがいる」と回答している生徒が減少し，逆に「全然いない」の回答している生徒が増加している。特に3年では14％の生徒が「全くいない」と回答している。

自分が間違ったことをしたり悪いことをしたら注意してくれる友達が一人でもいることは，自分が「見捨てられていない」存在であることを実感できることに繋がり，真に頼れる存在であろう。このような友達の存在が学年進行と共に減少していくのは，次第に友達関係に慎重になり友達への働きかけに躊躇する傾向が強くなっていくことを示唆しているのではないかと思われる。

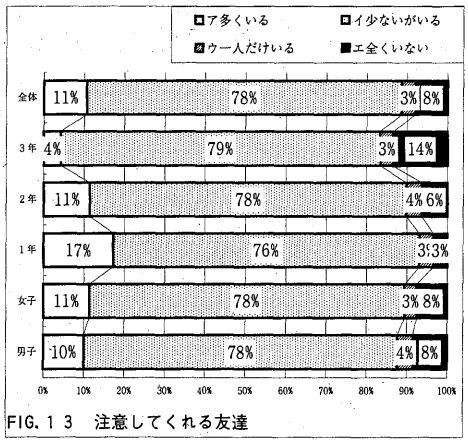


FIG. 1 3　注意してくれる友達

問 14　あなたは，機会があれば，自分の班や学級のために，役立つことをしたいと思いますか。(Fig. 14)

全体では，62％の生徒が「よく思う」「思う」と回答している。学年では，1年 54％，2年 73％，3年 61％の生徒が「よく思う」「思う」と回答し，学級の半数以上の生徒が班や学級に貢献したいと考えていることが伺える。

このことは，学校行事，学年行事などの取組や授業，学級の係り活動などにおいて，消極的な生徒を取組に巻き込み，全体としての達成感や成就感を共有でき，教育効果をあげる大きな要因となっていると思われる。

学校教育の一つの目標は，このような前向きな生徒を一人でも多く育成することであり，このような生徒のはたらきかけが消極的であったり，不安が強かったり，自信がなかったりする生徒を引き上げてくれることを実感することが多い。

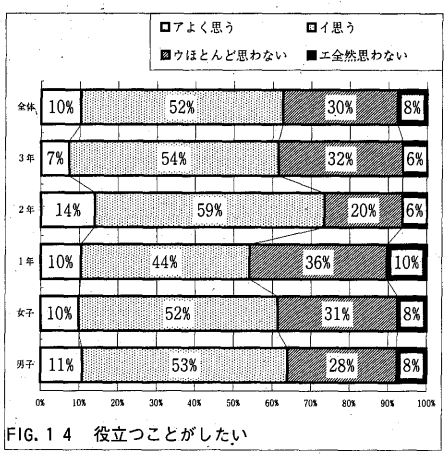


FIG. 1 4　役立つことがしたい

問15　あなたは，自分が落ち込んでいるとき，支えてくれる友達がいますか。(Fig.15)

全体では，85%の生徒が「多くいる」「少ないがいる」と回答している。学年別では，1年生で88%，2年生で87%，3年生で81%の生徒が「多くいる」「少ないがいる」と回答している。しかし，学年進行とともに，「全くいない」と回答している生徒が1年8%，2年10%，3年15%と増加している。これらは問13「間違ったことや悪いことをしたら注意してくれる友達がいますか」と同様の傾向を示している。

また，男女別では，33%の女子が「多くいる」と回答しているのに対して，15%の男子が「全くいない」と回答していることをどのように捉えればいいのだろうか。女子は男子と比べ，より支えてくれる友達を希求しており，友達に支えられていることをより強く実感していると推測される。どんなに些細なことであっても「支え—支えてもらう」という関係は相互に成り立っているはずであるが，どの程度そのことを感じ取っているかにも関係してくると思われる。

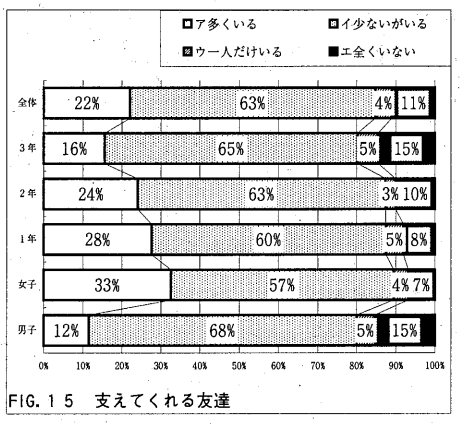


FIG. 15　支えてくれる友達

問16　あなたは，自分が他の人にどう見られているか気になりますか。(Fig.16)

全体では，71%の生徒が「大変気になる」「気になる」と回答している。学年では，「大変気になる」「気になる」と回答した生徒は1年68%，2年70%，3年74%と増加している。男女別では，男子の63%，女子の78%が「大変気になる」「気になる」と回答している。

身体，容姿，性格，行動，学習，運動などについて，自分がどのように他者から見られているのか，他人の視線や他者評価を気にする傾向は学年進行とともに強くなること，そして，女子に強いことは，思春期の特性ではないかと推測される。

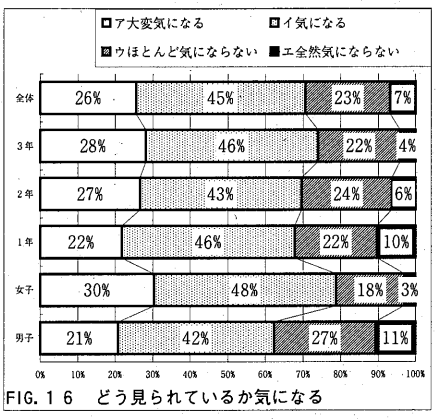


FIG. 16　どう見られているか気になる

問17　あなたは，周りのことが気になって，自分の思い通りに話したり，行動したり出来ないことがありますか。(Fig.17)

全体では，66%の生徒が「よくある」「時々ある」と回答している。学年別では，「よくある」「時々ある」と回答した生徒は1年59%，2年68%，3年72%と増加し，男女別では女子に多くなっている。

この傾向は問16と同様の傾向であり，会話や行動が他人の視線や他者評価に影響されるという側面を示唆している。

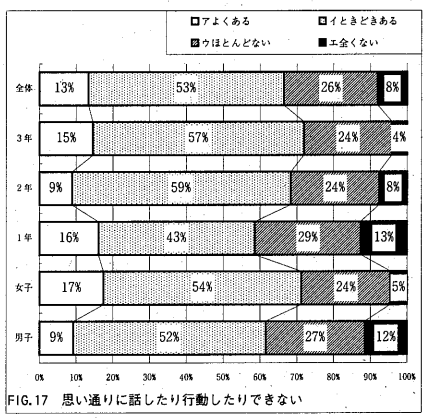


FIG.17　思い通りに話したり行動したりできない

問18　学校へ行きたくないと思うことがありますか。(Fig.18)

全体では，55%の生徒が「よくある」「時々ある」と回答している。学年別では，「よくある」「時々ある」と回答した生徒は1年52%，2年48%，3年62%である。男女別では，男子の49%，女子の60%が「よくある」「時々ある」と回答している。

注目すべきは，「よくある」と回答している生徒が1年3％，2年9％，3年16％と学年進行とともに増加していることである。

学校回避傾向は学年が進行するにつれて大きくなり，男子より女子に強いと言わざるを得ない。このような「学校へ行きたくない」という感情が強い場合，何かのきっかけがあれば不登校に陥るということを示唆しており，欠席日数には表れない不登校の潜在群として認識しておかなければならない。

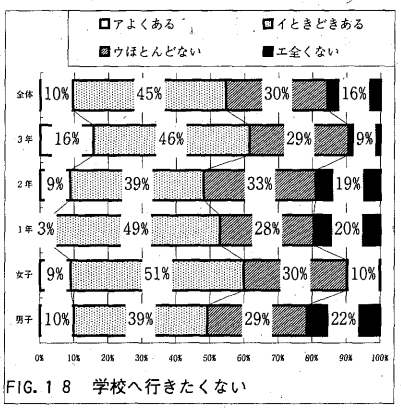


FIG. 1 8　学校へ行きたくない

問19　あなたは，朝，学校に行くとき，頭やお腹が痛くなったり，気分がわるくなったりすることがありますか。(Fig.19)

全体では，39％の生徒が「よくある」「時々ある」と回答している。男女別ではほとんど差異は見られない。しかし，学年別では，「よくある」「ときどきある」の回答した生徒が1年46％，2年39％，3年34％と学年進行とともに減少している。問18の学校回避傾向は学年進行とともに増加するにもかかわらず，その学校回避傾向が「身体症状」としては表れる傾向は減少する。このことは，学校回避傾向が低学年ほど「身体症状」として現れやすいことを示唆している。

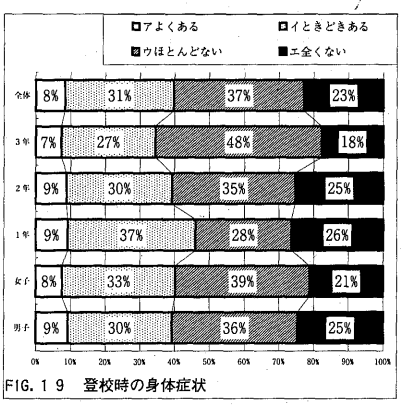


FIG. 1 9　登校時の身体症状

問20　あなたは，友達や先生が自分のことをうわさしていると感じることがありますか。(Fig.20)

全体で，44％の生徒が「よくある」「ときどきある」と回答している。学年では，「よくある」「ときどきある」と回答している生徒は1年52％，3年44％と多い傾向を示しているが，これに比べ2年では37％と少ないことを示している。男女別では，男子40％，女子50％と女子の方が「よくある」「ときどきある」と回答している生徒が多い。

女子に「自分のことをうわさしている感じ」と捉える傾向が強いことが伺える。

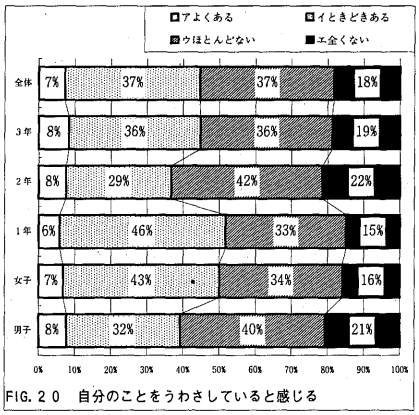


FIG. 2 0　自分のことをうわさしていると感じる

問21　あなたは，まわりの人となんとなくあわないのではないかと感じることがありますか。(Fig.21)

全体では，51％の生徒が「よくある」「時々ある」と回答している。学年でも，約50％の生徒（1年51％，2年48％，3年55％）が「よくある」「「時々ある」と回答し，「周りの人となんとなく合わない」という違和感を抱いている。

男女別で見ると，男子40％，女子63％の生徒が「よくある」「ときどきある」と回答し，男子より女子に周りに対する違和感を抱いている生徒が多く見られ，問16，17，20と同様の傾向を示している。

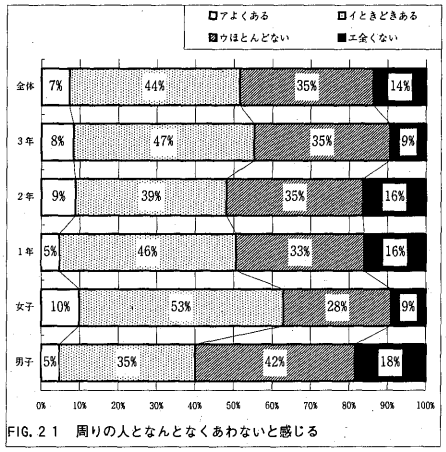


FIG. 2 1　周りの人となんとなくあわないと感じる

問22　あなたは，その場の雰囲気にとけこみにくいと感じることがありますか。(Fig.22)

全体では，53%の生徒が「よくある」「時々ある」と回答している。学年では，1年49%，2年52%，3年58%の生徒が「よくある」「時々あると回答し，学年進行とともに増加する傾向を示している。また，男女別では，男子45%，女子63%の生徒が「よくある」「時々ある」と回答し，男子より女子の方が「その場の雰囲気にとけこみにくい」という疎外感を抱いている生徒が多いことを示している。問16，17，20，21と同様の傾向を示している。

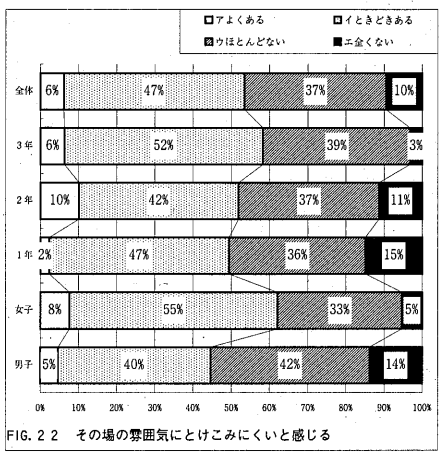


FIG. 2 2　その場の雰囲気にとけこみにくいと感じる

問23　あなたは，まわりの人に言われたことが大変気になってしまうことがありますか。(Fig.23)

全体では，66%の生徒が「よくある」「時々ある」と回答している。学年別では，1年61%，2年63%，3年73%の生徒が「よくある」「時々ある」と回答しており，学年進行とともに，この割合が高くなっていることを示している。

男女別では，男子61%，女子71%の生徒が「よくある」「ときどきある」と回答しており，男子より女子に「周りの人に言われたことが気になる」という感情を抱いている生徒が多い。周りの人に言われたことを気にやみ，悩むという心性が女子に強いと推測される。この傾向は問16，17，20，21，22と同様である。

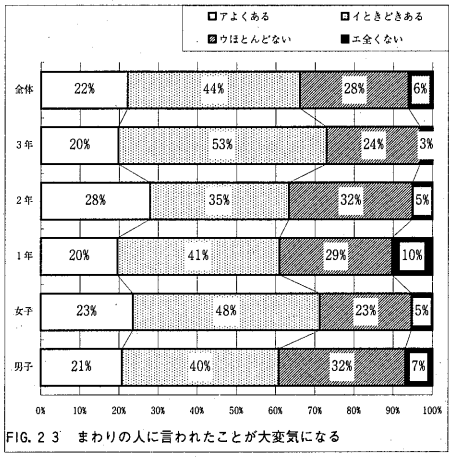


FIG. 2 3　まわりの人に言われたことが大変気になる

Ⅳ　総合考察　―意識調査を通して―

1　学校の教育活動の意識

「学校の勉強」「学校生活の中で打ち込んで取り組むこと」という問いから，学校の教育活動に対して生徒がどのような姿勢で取り組んでいるのか考えてみたい。

(1) 勉強

全体では，75%の生徒が「よく頑張っている」「頑張っている」という意識を持っており，「よく頑張っている」という意識を持っているものは1年6%，2年15%，3年4%と2年生が最も多い。「頑張っている」という意識を持っている生徒は学年間でほとんど差は無く65～68%である。全体的には女子が男子に比べ頑張っているという意識が高い。しかし，全体で25%の生徒が「あまり頑張っていない」「頑張っていない」としており，その中でも学年があがるにつれて，「全然頑張っていない」という意識を持っている生徒が，1年0%，2年1%，3年8%と増加する。学校生活の大多数の時間を教科学習に費やす中学生にとって，授業に乗りきれないことは大きな悩みであり，苦痛であろう。日々の授業に意欲が低下していたり，意欲を失う要因として，個人要因，環境要因，教授要因が考えられるが，意欲を失っている生徒をこの観点で見直し，手を差し伸べていただきたいものである。

(2) 学校生活の中で，打ち込んで取り組むこと

「打ち込んで取り組む」という言葉の意味を「面白い，楽しい」「やりがいがある」「真剣になれる」「達成感がある」「我を忘れ没頭する」と置き直して良いのではないか。この視点で「打ち込んで取り組むことがあるか」ということを考えてみたい。

全体で，80%の生徒がこのような感情を学校の教育活動を通して抱いていると思う。しかし，20%の生徒があまり抱いていなかったり，抱いていないという状態が浮かび上がってくる。ましてや，3年生において7%の生徒が「全然打ち込むことが無い」という状況は，深刻である。

打ち込むこととして，授業，部活動，生徒会の委員会活動や学級での係り活動，学校行事，友達や先生との会話などで回答を求めた。「授業」を打ち込むことと回答した生徒は 23%であり，学校の勉強に対して「よく頑張っている，頑張っている」と回答した生徒が 75%であることと比べ，隔たりが大きい。勉強は「よく頑張っている，頑張っている」としながらも，勉強が打ち込むことになりえていない生徒が多い理由として，勉強を「よく頑張っている，頑張っている」という意識の根底に，「楽しくはないが，勉強はやらなければならないもの」で決して楽しいものではないという思いがあるためではないか。考えてみれば当たり前のことである。

打ち込むこととして男女で共通しているのは，「部活動」と「友達との会話」が上位を占めていることである。ほぼ80名ずつの男女が「部活動」を，男子35名と女子62名が「友達との会話」を打ち込むこととしてあげている。全体で90%の生徒が部活動を「よく頑張っている，頑張っている」と回答していることからも，部活動が学校生活の中で重要な意味を持っているのである。この部活動の意味や意義を学校現場で検証してみる必要がある。また，休み時間に「友達との会話」に没頭したり，会話を求めて友達に駆け寄っていく姿をよく見る。友達との会話が学校での緊張を緩和させるのか，それとも，会話を通してグループへの所属感や自分の居場所を確かめているのか，その意味は定かではないが，男子より女子の方が「友達との会話」がより重要な意味を持っていることは確かである。

打ち込んでいるものを複数回答可で生徒に選択させたが，その選択傾向に性差が見られる。「授業」と「部活動」を選択した生徒数に性差は見られないが，生徒会・委員会活動の仕事や学級や班の係り活動，合唱祭や体育祭などの学校行事を選択した生徒数を見ると，男子より女子が格段に多くなっている。ということは，男子に比べ女子の場合は一人一人が「打ち込むこと」として数多く選択したことになる。「打ち込むことがあるか」という問いに性差は見られない（「いつもある」「ときどきある」と回答した男子79%，女子81%）にもかかわらず，女子は数多くのことに「打ち込んでいる」という意識を持っていることになる。この性差をどう解釈すればいいのだろう。肯定的に捉えるなら，女子は男子に比べ積極的である，学級をよくしたいという願いが強い，教師の指導の意図を理解し意気に感じて取り組む，などであろうか。否定的に捉えるなら，何事にも一生懸命にならないと安心できないという強迫性が強い，日頃の友達関係などのストレスやしがらみを忘れたいがために行事などに没頭する，などであろうか。とにかく，生徒一人一人が学校行事や生徒会活動や学級の係り活動など広範囲にわたって打ち込むこととして選択している事実から，学校が多種多様な教育活動を展開することが一人一人に「打ち込むこと」を見出すきっかけとなっていることは間違いない。

打ち込んで取り組むという言葉を「面白い，楽しい」「やりがいがある」「真剣になれる」「達成感がある」「我を忘れ没頭する」と捉えることもできると先に述べたが，このような思いがもてるようになるには，自分で目標を立て，自分でやりきり自分で自分を評価するという個人の内的作業だけではない。評価を与える教師や仲間，感性や興味関心の違う一人一人で構成されている集団で取り組み挫折感や成就感・達成感を共有する仲間の存在，即ち，自分を取り巻く集団との関係性を抜きにして語れない。そこで，自分が所属する学級や友達に対する意識をみてみることとする。

2 所属している学級の意識

学級について，全体で71%の生徒が「大変よい学級である，よい学級である」と回答し，この傾向は各学年でも同様である。学級内での関わりを見ると，全体で62%の生徒が自分の班や学級の仲間が間違ったことや悪いことをしていたら注意したいと考えており，特に2年生と女子でこの傾向が高くなっている。そして，全体で62%の生徒が機会があれば自分の班や学級のために役立つことをしたいと思っており，2年生でこの傾向が高くなっている。また，「機会があれば，自分の班や学級のために，役立つことをしたい」と「仲間が間違ったことや悪いことをしていたら注意したい」の回答傾向が類似している。

学級内の生徒を仲間と位置付け，関わりを持とうと能動的に働きかけている姿が想起され，安心した生活空間として学級が生徒の中に位置づいていることが伺える。学級内で多少の問題があっても，そこで生活する一人として問題解決の主体者となりえる，また，行事などの取組においても生徒同士がお互い働き掛け合うことが期待できると思われる。注意したいということも含め，学級のために役立つことがしたいという意識の高低が学級の質を表す一つの指標ともなろう。

3　友達関係の意識

関係性のもう一つの側面として友達関係の意識をみてみたい。今の友達との関係について，全体で92%の生徒が「うまくいっている，だいたいうまくいっている」としているが，男女別では13%の女子が「あまりうまくいってない，全然うまくいっていない」としており，男子と比べ高くなっている傾向を示している。男子より女子のほうが友達関係で悩みなどを持ちやすいとも取れる傾向である。

また，全体で99%の生徒が学級の中に気軽に話し掛けてくれる友達が「一人以上」いるとしており，ほぼ全体が気軽に話し掛け，気軽に話し掛けてくれる存在を持っていることになる。しかし，１%の生徒が「全くいない」という生徒の存在を見落としてはならない。

そして，全体で 84%の生徒が悩みを打ち明けたり，相談したりする友達が「一人以上」いるとしているが，16%の生徒が「全くいない」のであり，男女別で見ると男子の 24%女子の８%が「全くいない」としている。しかし，悩みを打ち明けたり相談したりする友達が「一人以上いる」としている生徒は学年を追うごとに増加傾向を示していることに注目したい。

さらに，全体で89%の生徒が落ち込んでいるとき，支えてくれる友達が「一人以上」いるとしているが，学年が進行するとともに「全くいない」とする傾向が高くなり３年生では15%となっているとともに，男女別では，15%の男子が「全くいない」としている。

この「友達関係がうまくいっている」「気軽に話し掛けてくれる友達がいる」「悩みを打ち明けたり，相談したりする友達がいる」「落ち込んでいるときに支えてくれる友達がいる」の関係をどう見ればいいのだろうか。そのことを探るために，友達関係がうまくいっているとする群と友達関係がうまくいっていない群に生徒を分け，話し掛けてくれる友達・相談したりする友達・支えてくれる友達それぞれについて回答を整理した。

その結果をTable 1に示す。

Table 1「友達関係について」

友達関係	友達関係の様相	6～10人	2～5人	1人	いない
うまくいっている群	話し掛けてくれる友達の存在	７１%	２７%	２%	０%
	相談したりする友達の存在	１３%	６６%	６%	１５%
	支えてくれる友達の存在	２４%	６３%	３%	１０%
うまくいっていない群	話し掛けてくれる友達の存在	３３%	４８%	５%	１４%
	相談したりする友達の存在	０%	６２%	１４%	２４%
	支えてくれる友達の存在	０%	５７%	１４%	２９%

友達関係がうまくいっている生徒群では全員が話し掛けてくれる友達がおり，71%の生徒が6～10人もいるのに対して，友達関係がうまくいっていない生徒群では14%の生徒が話し掛けてくれる友達が全くいないのである。また，相談したりする友達や支えてくれる友達が全くいないという生徒の割合も友達関係がうまくいっていない生徒群の方が明らかに高くなっている。

「話し掛けてくれる・話し掛ける」という関係は表面的な関係に捉えがちであるが，例えばそのグループに属し居場所がある，友達として認知されている，など自分の存在を確認し安心感を与えるという非常に重要な意味を持っていると思われる。一般には友達関係は「気軽に話し掛けてくれる」存在の獲得が基になって「悩みを打ち明け，相談したりする」「支えてくれる」存在の獲得へと表面的な繋がりから内面的な繋がりへと質的な変化が起こっているのではないかと思われる。しかし，そのような存在を獲得したいがその存在の獲得に失敗した生徒（そのような存在を必要としていない生徒もいるかもしれないが）もいるという事実を資料「友達関係」の一覧表が示してくれている。

気軽に話し掛けてくれる，話し掛けるという相互の関係から，自分の悩みを聞いて欲しい，アドバイスがほしいにもかかわらず相談できる存在の獲得には心理的葛藤があるのではないかと推測できる。すなわち，悩みを打ち明け相談したいと思っていても自分の内面を語ることに対する恐れを抱いているため相談できないというアンビバレントな心理状態になっているのではないか。しかし，学年進行とともに「相談できる友達」がいるという生徒が増加してくる実態から，内的世界の成熟とともに，この心理的葛藤を乗り越え，自分の内的世

界を語ることができる存在を獲得していくと言えるのではないか。

また,「支えてくれる」存在の獲得についてであるが,「相談できる友達」を獲得していく生徒が学年進行とともに増加する傾向の中で,「支えてくれる友達」が「一人以上いる」としている生徒が学年進行とともに減少する傾向を示している。「相談する友達」が「支えてくれる友達」になり得ていない場合があり,どうも「相談できる」と「支えてくれる」という意味合いが異なるようである。それでは,生徒は自分が落ち込んでいるときに「支えてくれる」とは,どのような存在をイメージするのであろうか。生徒が落ち込んでいるとき「支えてくれる」という意味付けが問題である。生徒の様子を見ていると,例えば,話を聞いてくれる,なぐさめてくれる,励ましてくれる,寄り添うように一緒にいてくれる,一緒に行動してくれるなどであろうか。また,「支えてくれる友達がいる」と「注意してくれる友達がいる」の回答傾向が類似しており,「支えてくれる」という意味の一つとして「注意してくれる」ということも考えられる。この「支えを失っていく生徒」の増加をどう捉えればいいのか。例えば,「注意をする」という場合,中学1年生では素直に「やめとけ」「わかったよ」と言えるものが,中学3年生になるとその一言がなかなか言えなくなってくる。このようにお互い支えようとする,その働きかけ方に変化が起こるのではないだろうか。この変化に伴って「支えを失っていく」と感じるのではないか。「このことを言ったら相手を傷つけるのではないか,素直に受け止めてくれるだろうか」,あるいは「本当に自分というものを分かってもらえるだろうか」という意識が学年を追うごとに強くなり,お互いが支えあいたいのだが躊躇してしまうということではないだろうか。「支える」「支えてくれる」とは「自分というものを分かってくれる,受け止めてくれる」という自分の存在自体を感じさせてくれる意味合いを含んでいるようであり,「相談する」以上の深い心的繋がりが想像される。

更に,男子に比べ女子の方が「相談する友達」や「支えてくれる友達」が「一人以上」いるとしているものが多いという事実は,複雑な内的変化に伴い自分というものが希薄になっていく思春期では,男子より女子のほうがより「相談する」「支えてくれる」存在を求め必要としていることを物語っているのではないか。筆者らは,女子間で「グループから離れるとなかなか元に戻れない」「友達をうばわれた」「はずされる」といった,友達という存在の獲得にともなう葛藤やそれに伴う摩擦が発生することが多いように感じているが,実際はどうであろうか。

4 対人不安の意識

学校という集団生活の中では,対人不安感の抱き方が教育活動への関わりや友達との関わりに何らかの影響を与えているのではないかと思う。そこで,対人不安感について考えてみたい。

「自分が他の人にどう見られているか気になる」「まわりのことが気になって,自分の思い通りに話したり,行動できないことがある」「周りの人となんとなくあわないと感じることがある」「その場の雰囲気にとけこみにくいと感じることがある」としている生徒は,学年進行とともに増加し,男子より女子に多い。

周りの自分に向けられる視線や評価,その場の雰囲気などに過敏に反応している傾向が学年進行とともに強くなっており,周りの状況によって自分の行動を模索する姿が想起される。自分というものを貫きたいという心理と周りとの関係性の中で周りと自分というものに折り合いをつけていこうとする心理がともに働いているようである。その葛藤によって引き起こされる対人不安感と捉えるならば,自己を確立していくためには誰もが大なり小なり経験し,自分の中で対人不安感と付き合っていかなければならない。

この対人不安感とうまく付き合えない場合,学校の教育活動や支え—支えあうという深い意味での友達関係の構築に少なからず影響がでるということは容易に想像される。特に,女子に影響が出やすいのではないかと危惧される。

まとめ:「心の拠り所」をめぐって

思春期という時期は非常に不安定で,危機的な時期であるといわれる。したがって,その思春期のまっただ中である中学生は,学校現場において,非常に理解や関わりが難しく,容易にその存在基盤が不安的になり,不登校等の問題行動として出てきやすい。そのような中で,少しでも生徒の心の安定を図るには,まず心の拠り所となる場・空間の提供が必要である。

心の拠り所となるものは,学校生活における勉強であったり,打ち込めるものであったり,自分のクラスで

あったりする。しかし，その基盤になるものは，周りの人との人間関係であり，勉強やクラブ活動も結局はそれを通して友達とおしゃべりしたり，励まし合ったりする中で営なまれるのであり，友達との関係がうまくいっているか，うまくいっていないかによって学校生活は大きく違ってくるし，対人不安感もその友達関係の中からうまれてくるものである。

つまり，「心の拠り所」となるものは，人と人との関係の中からうまれてくる関係性をともなった場・空間ではないかと考えられる。

注1）本研究は，川戸（現　網野町立網野中学校）が平成12年度京都府現職教育職員長期研修派遣として京都教育大学で行った研究報告を基にして作成したものである。

注2）文部省は，平成13年度から文部科学省に変更されたが，本論で用いた資料等は平成13年度以前のものなので，そのまま文部省として表記しています。

文献

杉山信作・高田広之助・大沢多美子（1988）　情緒障害・問題行動の発現率とその年令による推移　小児の精神と神経28（2）

保坂展人（1995）学校を欠席する子どもたち　教育心理学研究　43

一谷　彊・相田貞夫・水谷昭（1990a）中学生の学校生活への充実感に関する教育心理学的研究（1)—学校生活への意識・行動と満足度　京都教育大学教育実践研究年報　第6巻

一谷　彊・相田貞夫・水谷昭（1990b）中学生の学校生活への充実感に関する教育心理学的研究（3)—調査項目の因子分析による発達的研究　京都教育大学紀要A　人文・社会

内田利広（1999）　学校カウンセリングと発達課題　（「学校カウンセリング入門」友久久雄編　第2章）　ミネルヴァ書房